

# ペスタロッチ『読書ノート』(1785~1796/97)の 未公刊手稿の研究 I

——問題の提起とみとおし——

宮 崎 俊 明

Die unveröffentlichten Manuskripte J. H. Pestalozzis  
„Bemerkungen zu gelesenen Büchern“ (1785~1796/97) I  
Toshiaki MIYAZAKI

## I 問題の所在

### 1. テキストの不完全さ

以前、筆者は「ペスタロッチ『読書ノート』の構造と思想—その社会批判, 人間学構想および教育思想—」(本誌, 第30巻, 1979, 31~67)と題して若干の考察をしたことがある。今回の本稿ではチューリヒ中央図書館および東独教育学アカデミー<sup>アルヒーフ</sup>古文書文庫が蔵するこの『ノートの手稿(以下MSと略記)』といわゆる批判的全集<sup>1)</sup>(以下KAと略記)所収のテキストとを照合し, 後者への未収録部分を確認した結果, そこでえた一定程度の知見と, さらなる研究のいわばもくろみの提示を課題とする。なお, その未収部分の転写の発表は, 別の機会に譲る。

1785年から96/97年にわたる『ノート』の執筆時期が, 初期では『リーन्हルトとゲルトルート』の陰にかくれ, 末期では『探究』草稿, 執筆, 公刊の時期と重なるにもかかわらず, 未定稿等のためやその他の事情で最近の重要な先行研究でKAのそれにふれたのは五指を出ない。そこでのとり

鹿児島大学教育学部 教育学科

本稿および今後のこの『読書ノート』研究に筆者が, 1982年6月~83年11月に西ドイツ, スイスに滞在中多くの研究費助成や助言, 友好, 紹介をうけた機関や個人の主なものは, 次のとおりである。記して感謝したい。DAAD(ドイツ学術交流会), DFG(ドイツ学術振興会), Universität Marburg, Universität Bonn。基礎資料では Zentralbibliothek Zürich, Akademiearchiv der Pädagogischen Wissenschaften der Deutschen Demokratischen Republik。二次資料では Universitätsbibliothek Marburg, Zentralbibliothek Zürich, Pestalozzianum Zürich, Niedersächsische Staats- und Universitätsbibliothek Göttingen, Universitätsbibliothek Basel, Herzog August Bibliothek Wolfenbüttel ほか多数の図書館。研究の推進等についてはマールブルク大学の W. Klafki, L. Froese, R. Pippert, H. Stübiger, ボン大学の J. Derbolav の諸教授, 批判版や書簡集全集の監修者 E. Dejung 博士, ベルリン教育大学(当時)の A. Rang 教授, スイスのザンクト・ガレン師範学校校長の H. Roth 博士, チューリヒ大学の A. Brühlmeier 講師。第一次資料では, チューリヒ中央図書館古文書部部長の J.P. Bodmer 博士, とくにその転写については Hessisches Staatsarchiv Marburg の F. Wolff 博士と R. Pelda 氏。

なお, 本稿は昭和60, 61年度文部省科学研究費一般研究(C)の一部でもある。

あげ方も職業教育論やとくに意志自由論に限られ、量的にも最大限10ページ程度にとどまっている<sup>2)</sup>。A. Israel 以降の3種のビブリオグラフィーほかにもこの『ノート』を単独に表題化したモノグラフィーは記載されていない<sup>3)</sup>。

先行研究の場合は、筆者の旧稿もふくめ、その使用テキストは H. Schönebaum が整理して KA 版の第9巻 (301~439)、第10巻 (21~28, 205~248)、第11巻 (15~28<sup>4)</sup>, 39~40) に1930~33年に公刊されたものであり、そこでの言及は、そのうち第9巻の一部、ペスタロッチの執筆時期でいえば1785年度から翌年秋の段階のものにすぎない。この『ノート』のテキストの定型のなさや校定上の難度は、KA の編集方針である テキスト・クリティーク (Textkritik)、事項説明 (Sach-erklärung)、単語説明 (Wörterklärung)、および人名地名索引 (Namen- und Ortregister) で構成される付説 (Anhang) のいずれをももたず、むしろ前二者については本文中に解題風に部分的に示され、後二者はその対象外におかれた事実でも判明しよう。また、そのために印刷上の活字ポイントが下げられた文字どおりの不完全テキストとなっている。かかるあつかいの事例には、KA 全28巻 (うち第17, 24巻はA, Bの2分冊) での幾多の草稿のなかでも、『ゲルトルート』の草稿の草稿ともいべき「準備と構想」(13. 360~389)<sup>5)</sup> ほか12点が見出されるが、その多くが成稿となって定着したのに反し、この『ノート』は分量では一番多く、時期についてももっとも初期のものに属している。いわばペスタロッチ研究の最大の難関といえるだろう。

テキストの確定こそ、研究に第一次の基本作業であるが、そのさい KA の第9巻以後の19巻分と書簡集全13巻のとに45年にわたり共同ないし単独で従事した E. Dejung を筆頭にしても、シェーネバウムが戦前に7巻分に参加し、この『ノート』の転写と解題の担当をした役割は、ペスタロッチ研究にひとつのエポックを画した精神史的研究の立場で公刊した浩瀚な自伝的四部作とともに特記されるべき業績である。

ただ、一般に校定における底本の確立が、MS の転写 (Transkription) の段階で複雑化し、一義的たりえない。その事例としてわれわれがもつ『隠者の夕暮』の場合を一瞥すれば、W. Feilchenfeldt<sup>6)</sup> による、KA 第1巻におけるその文献批判は、Ephemeriden der Menschheit (Bd. 1, St. 5, Mai 1780) と、Niederer 本ともいべき Wochenschrift für Menschenbildung (Bd. 1, St. 13, 14, 1807) に発表のもの、および草稿の3種に依拠している。また、その後に発表された H. Rupprecht<sup>6)</sup> によるテキストは、彼自身その前段で『夕暮』の表現のフォルムをとらえ、テキストの構造とそれに批判的照明を加える予備的作業をおえたあと(1934)、草稿と完稿との MS がもつ表記の原型の徹底的な回復をはかり、かつファクシミリをそこに添えて示した。児玉三夫<sup>7)</sup> もわが国で1973年にコッタ版の復刻をしたさいの『夕暮』MS に係わる作業をし、同じくファクシミリを添えている<sup>8)</sup>。ルプレヒトと児玉は、MS の改行状態をそのままに転写している点で共通し、記法の差はあっても単語上は綴字法の変母音、子音の t と th, tt, y, d などの差が中心であり、KA の各巻末に難語の差異、類同を示したグロッサリーにみられるような、いわゆるスイスドイツ語ないし時代文化を反映して別義異義を呈するとき差には及ばぬ範囲内のものである。しかし、一方、両者はその

テキスト・クリティークでも言及せぬままにしているタテ線で抹消した部分などの収録や復活の仕方に関しては異なっているし、ルプレヒトが筆蹟も筆記具も同じものでうったページを踏襲するのに対し、児玉は KA と同様の二次的にうたれた順序を採用し全体の編成に差をひきおこしている。しかも、児玉のファクシミリには、ルプレヒトのそれにはない二次的にうたれた番号があり、同一紙の表裏にわたるものが、前二者では移動するのに比し、ルプレヒトは完全に原初型を踏襲している<sup>9)</sup>。

校定が純粋に技術的な条件のもとにあるべきだとしても、たとえばニーデラーのごとく、テキストが校訂者個人やその集団、さらには体制のイデオロギー的認識利害が規制条件から完全に自由であるとは限らぬし、根本資料の公刊自体が検閲の対象となったり、それからカムフラージュされることすらありえた。また、ペスタロッツ研究の動向には、教育学動向の事実が投影されており、それが研究の余地や展望の可能性を提供する面と、その反対に研究のみならずテキスト作業すら規定し相対化する場合があった。ことに校定から解釈のレベルに事態が移行するにつれ、その解釈に基礎条件としての校定テキストの問題性が表裏両面で影響を及ぼす。したがって、われわれが『ノート』研究に着手する場合も、シェーネバウムの校定テキストとその精神史的研究との連関した表裏関係を念頭におく必要がある。筆者は旧稿において、KA の『ノート』でペスタロッツにみられる社会批判のラディカルな層位、自然概念の、先験的でなくむしろ経験的な人間学的構造、非ヨーロッパ的習俗への人類学的関心に注意し、従来の先行研究には最前者と最後者への注視が十分でなかったことを粗描したが、その後ペスタロッツに彼の教育行為を弁証するために「反政治性」を主張したり、精神科学的立場への還元へ急ぐ研究の多さを警戒するに至ったし、またシェーネバウムすらこのテキストの未定型を自己の精神史的研究への傾斜やそれとの整合性に向けた関心が転写と収録の選択のさいに影響すると考えることも、少くとも理論的には可能だとみるに至った。

そこで、KA に収録の部分とこの『ノート』の MS 全体—Handschriften der Zentralbibliothek Zürich, Nachlaß von Joh. Heinr. Pestalozzi, No. 315～321, 332～333, 338～344, 355, 357 および旧 Beliner Lehrerbibliothek, 現東独教育学アカデミー・アルヒーフ蔵の 7 枚 (KA. 10. 206～209 の C.J. Catteau. Tableau général de la Suede, 1790, Bern の抜書き他一種とひとつのアフォリズムに対応) —を照合し点検した。その結果、これらの KA の束のうち、シェーネバウムが J. Waser の図書メモだという冒頭の 1 枚をふくめて、転写収録されていない個所を部分的ないし全体的にもつ MS は、277 枚にのぼり、その行数は 4460 行、もし KA を補綴するとすれば、その個所はに 271 に及ぶことを確認した。

## 2. シェーネバウムの作業の 7 つの問題点

なぜ、かくも多くの欠落が発生したのか。シェーネバウムの力をもってしても、また KA の権威にもかかわらず、なぜこのように多くの分量が放棄され未収録のままになっているのか。あるいはそうならざるをえなかったのか。さらに、その後のペスタロッツ研究は、いかなる理由でこの部分に着手せず余 50 年が経過したのか。ここには、ペスタロッツをめぐる論議への新たな可能性が、たと

えば彼の思想的理論的形成、伝記的部分などの契機や背景について、ひそんでいないかどうか。いわゆる紛失不明原稿については、デーユンクのいうように問題は大きいし、ペスタロッチの生前の出版刊行物の浄書稿でも、たとえば『夕暮』、『ゲルトルート』、『シュタンツだより』などの有名作品のは残っていない<sup>10)</sup>。初期作品にはイーゼリンの意向や修正の手が入り、後期には『基礎陶冶の理念—レンツブルク講演—』のようにニーデラーが強く関与し、その時期の『夕暮』のテキストは原型から逸脱して改ざんに等しい場合のあるのも知られるとおりである。しかし、逆に諸般の事情でMSのまま陽の目をみず、定型化せぬ段階にとどまった場合、その形式上の完成度の低さは、いわゆる遺稿発掘をとおして解明される事例一般がみせるごとく、むしろ問題関心の原型や深さ、主題の範囲や大きさを示すことがある。ことにこの『ノート』のように情報収集の段階とその途上での直接的な反応を併記する場合は、いわれているごとく天才ペスタロッチの独自の面目を強調する視点や、この時期に「本は読まなかった」(13. 196) という彼自身の記述のいずれにも反する裏面などの批判的吟味をふくめ、彼の生々しい思考過程がうかがえるし、また検閲や交友関係をふくめ言語の社会的制約に及ぶ以前の、直接的な場面がみられ、そのかぎりでは資料としての重要度が生前刊行物より高くなる。

シェーネバウムによる原資料の転写作業と解題をふくむ客観的地平への位置づけや解釈についての業績は、そのもっとも均整のとれた成果の点でペスタロッチ研究史上の白眉であることには異論は少ない。しかし、彼の力と関心をもってしても、この『ノート』がKAのなかで特殊な、未完の形をとり、収録しえぬ部分を多く残した事実を考えるならば、そこにはMSをめぐる次のごとき原因理由・条件が浮かび上る。

1) 判読の困難ないし不能。これにはMSのインクのしみやとびちり(執筆後もそれ以前のもある)、手すき紙の上下左右、ことに右端と下部の損傷といった原因や、年月の経過のなかでインクが希薄になるといった化学的原因、さらには保存状態の不十分さが働いている。筆記具や用紙などもふくめ、たとえば彼と交流のあったK. Lavaterらのそれに比し雲泥の差がみられる。その上KAの校定者を悩ませたペスタロッチの筆蹟も判読の困難を増幅している。それは、イーゼリンのいうように「その手蹟、正書法、句読法の判読しがたい乱れ」(1. V)にもよるし、ペスタロッチ自らみとめるごとく「欠陥のある」(B. 3, S. 525) ものだった。『リーンハルト』の原稿の修正にイーゼリンに「思いのほか骨をおらせ」、J. Bodmer と共に師にあたる J.J. Breitinger も「不正確かつ非文学的」だと評したが(3, 455; R. 10. 518)、ペスタロッチの側にむしろ判読を妨げる大きな原因があった。イーゼリン宛の書簡の言を借れば、『夕暮』をめぐる「自分の原稿の不正確なことばのため(Wegen der immer noch unrichtigen Sprach meines Manuscripts) 苦勞をかけ」(B. 530. 28. [Sept. 1780])、「自分の文章の不明さ(die Dunkelheit meiner Aufsätzen)」をわびている(B. 526, [Januar 1780])。

2) 論旨などの意味不明瞭。これは執筆の中断や抹消、追加記入、加えて抜書きと自分の感想や論評との混在からきている。また、余白の少ない欄外の紙面を二次的にタテ書きに使用しており、そ

れがあわさって 1) の場合を助長している。ペスタロッツが欄外に付した記号などには、NB (nota bene), N (nota), N, N, ?, ×, +, ⊕ のほか、文、句、語への一本ないし二本の下線や斜線、複数にわたる大きいマルかっこやカギかっこ、これらが強い筆致で様々に記されている。しかもこの場合は、用紙の右側の三分の一から二分の一弱に及ぶ余白のときに多く、二次的に記されているのも注目される。そして、タテ、ヨコ両用で追加記入したコメントは 6 例であるのに反して、上の記号化した反応がほとんど同じ筆勢、筆記具、インクで記されている。シェーネバウムはとくに欄外の見出し語を重くみて、それをほとんど余すところなく紹介しているが、解読の過程で明らかに彼自身のものとわかる小さい? と? のマークが段落を単位としてうたれ、KA 未収録部分をもつ MS に限っても全体で約 130 個のうち? が約 70 個みられる。しかもそのうち KA に収録された部分のマークが斜線で抹消され残り約 60 個所が未収録なのは転写作業の難度を示すものといえよう。

3) 抜書き、ことにそのフランス語部分の除外ないし軽視。校定上の明言された原則ではないが、抜書きの該当ページの多くを明らかにし、ときにその原文との比較対照表を示しながらも、一方では転写し収録に至らなかった部分が多く、統一されていない。ことにフランス語論著の抜書きの大部分は収録から除外されている。したがって、事実としては、抜書きとフランス語の部分が収録すべきテキストの範囲に入っていないのが判明する。しかし、この『ノート』は、ペスタロッツ自らの執筆メモないしはその断片とみなしうるもの、執筆準備のための抜書き、一般的関心事や自分の私的心理的内容をその課題や背後動機とし、抜書きではフランス語部分のきわめて正確なそれや、要旨、トピックスの抽出など幅もひろいが、これらのいずれにも、注記や見出し語のほか上の 2) の種々のマークを付けるところからみて、そこには彼の思考過程の軌跡が示され、その思想形成の重要な契機となっている面がうかがわれる。したがって、この点はとりわけペスタロッツの執筆内容をテキストとして提示することに中心があったシェーネバウムに比しさらに重視して究明する必要がある。

4) 本人以外の筆蹟部分の除外、上の 3) でのべた抜書きでは、まず夫人アンナがそれをおこない、のちにペスタロッツ自身がマークを付している 312 行がそれである。なお、付言すれば、この MS の束の最初にタテ・ヨコ 225×220 ミリの変型サイズで右下方約 60×140 ミリが破損しながら、そこに 14 種の著者、書名、出版地、サイズのほか価格をも記した 1 枚の重要な MS がある。これは、シェーネバウムによれば、当時ペスタロッツが参画した組織のひとつ幸福振興協会 (Allgemeine Gesellschaft zur Beförderung sittlicher und häuslicher Glückseligkeit) の幹事 J.J. Waser の手蹟である。

5) 欄外見出し語による代替。ペスタロッツがひとまず書いたあと二次的に記した場合が多い見出し語を重視したシェーネバウムは、それを 1) と 2) の要因が手伝って解題的説明のなかに示し、転写の代替をさせるかのごとく扱い、その結果本文が未収録になった場合が多い。しかし、その「解題」が KA の通常のテキスト・クリティークと事項説明のそれに比し、量質ともに及ぶべくもない簡略化をしているのも否めぬ事実である。

6) 校定者の研究視角および時代の教育学動向に規定された認識関心の侵入。シェーネバウムの

研究成果である伝記的四部作は<sup>11)</sup>、1920年代からはじまるディルタイ派の文化教育学の系統にあって、いわば一種の文化価値の客観主義や精神史の立場にあり、二次大戦後の研究動向がみせたときペスタロッチの実存的・心理的・政治的なさまざまな状況での緊張、葛藤、矛盾、場面への掘下げは逆に少ない。それに、『ノート』への評価と把握の重点は、著作刊行の目的からしても、当然執筆構想にあった。また、たとえば『ノート』の内容となる論著の一覧化で27種が示されているが<sup>11)</sup>、子細に点検すれば、読む予定のものなどを含めると、そのタイトルは最大限2倍強の70余種に及ぶ。もちろん「このMSの文章が無限の価値をもち、かつ文献の砂漠ともいふべきものであって、この時期のペスタロッチを知るには、なによりまず抜書きの荒野を徹底的に調査せねばならない」<sup>12)</sup>、としたシェーネバウムであったが、実は彼がその論及で示す上の差と取捨選択をしたなかに、KAテキストを左右する条件が潜在しているとみることができる。

7) 当該部分のKA発刊当時におけるペスタロッチの研究解明の不十分さ。シェーネバウムを規定したこの条件は、上の発言にみられるごとく、将来のみとおしや課題に対する校定者の現実的かつ研究上の制約となっている。ちなみに『ノート』の当該巻号の刊行は、1930年から33年、シェーネバウムがその時期を扱った著書は、1937年である。転写の可否、収録の採、不採の決定要件は、単に技術的なそれだけではなく、ことに『ノート』と関連の深い『探究』の草案、決定稿その他の完備した刊行はその時点でなお決して十分とはいえず(1938年)、とりわけ『ノート』の周辺や背景ををさぐる重要資料としての書簡などの条件も同じだった。時期の上では後期が中心でバラツキがあるとはいえ、たとえば作品の所在確認点数は、1927年で160点、80年で300点、書簡は1927年で1,500通、80年で6,250点、現在は6,390点といった格差がある<sup>13)</sup>。それにKAの編集の統一方針である事項説明を、もし他の作品と同等程度に仕上げようとすれば、ことにKAの『ノート』に限っても該当する総ページ218ページのなかで190人に及ぶ登場人物の名は、10巻本のRascher版の人名索引が238名であるから、きわめて多く、かつ未収録部分のそれを加算するとさらに増えKAの付説はひじょうに大部になったであろう。それほどになお知られざる未踏の部分を残しているのである。

### 3. ペスタロッチのもうひとつの執筆方法 —調査による執筆—

『ノート』のMSにはそのアルファベット符号からして惜まれるべき紛失があるが、内容上は体系的作品の欠落に比べれば、その資料的価値の低下はむしろ少ないといえる。この『ノート』はテキストとしての決定稿になる完成度においてではなく、むしろペスタロッチの思考過程、執筆方法、私的手記などをめぐる資料として他の諸作品にはない固有の希少価値をもち、その点から独自に評価されるべきである。それは研究一般がそうであるように、ペスタロッチにもあったその準備作業としての調査研究的な側面や段階が示されているきわめて重要な資料だからである。従前のペスタロッチ研究では、生前刊行のいわゆる有名作品の継起に連続、発展、転換が論じられてきたが、これに反して研究のはるかに遅れているのが、構想的草案、浄書稿、出版をめぐる改稿、さらには再版のための改筆などの研究であり、もうひとつは、これらの連続、発展、転換や修正を論じる場合に媒介となるこの『ノート』のごとき存在への着眼である。

ペスタロッチの著述にみられる対象への感情移入や激情は、逆に概念的表現の少なさないしそれへの反発やときに突出した使用とも関連がある。そのため、読書行為が彼には非本来的ないし不要とみる把握が従来から優勢であった。しかし、彼の読書や情報収集とその執筆への適用の事実場面をみる場合、無尽とっていい想念の吐露に反して、奇異ともうつる長い引用や挿入にも気づかされる。たとえば、著名な作品の例でも、『立法と嬰兒殺し』における14の審問判決の記録の提示(9. 116～131),『探究』におけるゲーテの詩(12. 31f)とシュテーファー運動をめぐる自分の論調「チューリヒ湖畔と近在の自由の友へ」の挿入(12. 116～118),さらには『ゲルトルート』におけるJ.R. Fischer のカント的ペスタロッチ解釈の紹介(13. 204～211)など知られるところであるし、これら四つが、共通して批判的論議の対象としてではなく自分の論証の強化をねらう長い挿入となり、全体の構成に均衡を欠く面もなしとしなかった。

もっとも、ペスタロッチ自身、引用が自分の文体に不調和をもたらすマイナスを自覚していた発言を『ノート』末期の『探究』でし(12. 114),論調の構成や、思想形成の方法や過程で彼我の間にあ  
る差を強く意識しているが、『ノート』着手の前段階ではむしろ自分の方法に客観的な一般性の不足を懸念し、その獲得への期待をもっていた。そのことは『嬰兒殺し』の原稿についてのベタイーゼリン宛の次の手紙が裏書きしている。『『嬰兒殺し』の原稿のはじめの部分にはだれでもひじょうな大言壮語(declamatorisch)を考えるといます。ただ、正直、私は自分の書き方の調子という点で達人の域にはほど遠いのです。なにかを書こうとすると、私はまず最初に自分の心に浮かぶことを集め、秩序もなくメモにしていきます(so samle ich zuerst, was mir einfällt, ohne Ordnung in ein Memorial)。それで問題のさまざまな観点がまったく秩序のない混沌<sup>カオス</sup>ともなりますし、もうなにも心に浮かばず、新しい観点もなくなったとき、自分のメモをとり出し、書き集めたものをもう一度頭に入れてまとめ、中心になる観点を取り出します。秩序だった基盤、全体のみとおしが私の頭と心を温めます。私は、読み書き語るのですが、要は問題全体をみとおした結論に対して確たる気持で筆をとりまします。私にはもうイメージも結論も語りぐちも最初にあるのです。そして次第に熱気を帯び、自分の全体像が自然にみえてきますし、考え調べ点検して究明が進むにつれ、あたかも得業士(Licentiat)のようにさめていきます。これが私の執筆方法のほんとうの過程です。それは練習の類には反するでしょうが、生きた人間にはふさわしい方法だと思っています」(B. 543 [März 1781])。

これは、1783年5月に出版の形をとった『嬰兒殺し』の序言でいう「長年の試みで今もって正しいと考える対象を表象する方法」(9.3),「自分の目に入る第一印象」(9.7)で処理する仕方であるし、かかる方法こそ政治的パンフレットであれ、教育体験の記録や講演であれ、ペスタロッチの大部分の著述に該当し、先の引用事例の方がむしろ非本来的だとみられてきた。しかし、彼自身の目にも、その論調は情熱的だが断片的なアフォリズムに、力強いが事実の裏づけの希薄さや分析の不足におちいり、さらには引用によって文体のバランスをくずし、重複や冗舌が入るなら、まさに修辭的大言壮語に墮すことに気づきはじめる。したがって、上の手紙のほぼ2ヶ月後、チューリヒの市文書官 K.

Escher に宛てた書簡は、その所有になる宗教審問文書 (Inquisitionsakten) 17部を借り、うち『嬰兒殺し』に使用した14部の返却を告げているように (B. 552,8, [Juli 1781]; 9.581), 資料調査という局面が彼の営みに加えられていく。先のイーゼリンへの手紙でいう「メモ」は、その後10年の間に犯罪論、所有論の方面でいわば「断片的草案」としてすすめられていくし (9. 195; 10. 1ff, 29ff), 『ノート』でも「人間論メモ」(Memoire über den Menschen, 9. 347) や「自著人間論のために」(Adm[ein] B[uch] üb[er] d[en] M[enschen], 9. 356) のごとき類似した標記をするのがみられる。

ただ、内容的にみれば、『ノート』は上のメモの域に達せぬばかりでなく、いわば雑録、雑記に近く、論旨の統一性は少なく完成度は低い。シェーネバウムは上のメモの未分化なもの、執筆の粗案とみなそうとした。その結果、抜書き部分やそれへのペスタロッチの印象、反応、論評等の部分が、逆に重視されず、その多くが転写から除外される一因となったのも否みがたい。われわれの立場は、むしろ、抜書き部分とそれへのコメントの重視にあり、この『ノート』が先の手紙でいう「メモ」のさらに未分化の根底部分とみなすところにある。また「着想」を単に主観の心情的吐露とし、純粋な想像力の成果として一元化するのではなく、着想が収集に及ぶのみでなく、逆に収集が着想を生みそれを方向づけ規定する循環を重視することにある。

## II 今後の研究課題

### 1. 原典との比較・結社活動・習俗文化・伝記

以上においては、今後の『ノート』研究の前提として、そのテキストの事実にあふれながら、そこになお解決されるべき問題点や補充されるべき余地があることを主張したが、以下では若干内容面に立ち入り、そこで進められるべき研究の必要性和そこから期待されるべき可能な課題の主たる方向を予備的に略記しておく。

1) まず、この『ノート』に関連する70余種の論著のタイトルが、ペスタロッチの思想形成に対してもつ影響や類似性と、他面では彼からのそれへの批判や彼なりにその独自性を示したものとにつき調査する必要がある。たしかに、ペスタロッチと同時代者との比較考察の成果には、3種のビブリオグラフィーに照らしても、多岐にわたる記載があり、たとえばイズラエルのインデックスでは、『ノート』でとりあげられた論者のうち、I. Kant や E.C. Wieland の他7人の名が見出されるが、その関係が論じられているのは半分にすぎず、クリンクのものでは個人としては40人、報告数は200点近くにも及ぶ。これらはおおむね直接の交流者だが、『ノート』の時期に限れば数人にすぎない。また、『ノート』に登場する論者は、同時代者でも知人の G.A. Gramont, Franziska Romana など数人と、とくにラバーターを除き、その大部分が印刷物を介するのみの間接的接触であった。一例をあげれば、近年研究関心の高いフリーメーソンの一分派の光明派 (Illuminatenorden) の主導者だった A. v. Knigge に対する場合など、その自伝やフランス革命での政治的立場にはただならぬ関心を示し、KA に未収録の MS でも目立つひとりである。



従来の研究において『ノート』へのかかる軽視ないし看過の発生した要因としては、極論すれば、ドイツ観念論やフランス啓蒙主義といった精神史のいわば表街道にペスタロッツをひき出し、そこでの代表者とこの「教育的天才」の類同や差異をみようとした強引さがあったし、それがむしろ今日社会史の成果などに指弾される限界となっている。われわれはこれらの「高い」啓蒙主義の精神史ではなく、逆に「ひくい」啓蒙の教育史を求める。そのとき、のちの時代が作りあげた啓蒙主義のイデオロギーとその産物である明るい教育学とは逆に「闇の」教育学の方へ傾斜し、いわば「子どもの泣くのが聞こえる」といった時代の心性史や子どもの心理発生史がみせる暗さや悲慘に直面するであろうし、啓蒙の実践がはらむ否定的弁証法の性格にもぶつかるであろう。

ペスタロッツがこの時期に接した図書類は主として借用したのだが、実際に選択や入手ができたり、図書館、読書サークル、思想結社で閲読しえた現実的な条件とその限界、さらには、結社のメンバーに推薦されたりして読む予定のメモをもちながら実現しえなかった不如意など、これらが読書ノートの記入を左右している事情であり軽視できぬ条件である。そこでまず、たとえば1783年から85年にかけての *Deutsches Museum, Berlinisches Magazin der Wissenschaften und Künste, Allgemeine Deutsche Bibliothek* の三種の定期刊行物がもつ多くの論文、報告、書評など彼が閲読した原型にあたり、どこが『ノート』に記入されたかを照合し点検することで、彼の問題関心のありかの抽出が重要となる。一方、その抜書きでの変更や除外部分のありかも彼の関心のありかを裏面から把え、全体として鮮明にするのに有用である、と考えられる。そしてさらに進めてこれらの定期刊行物には、当時の出版事情や読者層の指向を反映して、内容の紹介が濃厚な書評が多くを占めているが、その単行出版物の原本やその著者の他の論著を参照することでペスタロッツの前にあった知的世界とそこでの影響や対立の関係をみることができるだろう。

2) 当時の読書界や出版状況の一端はペスタロッツ自身の公刊物の経過でも知りうるが、この研究のひとつの課題は、市民的知識人層の読書事情を条件づけていた思想結社の影響力の把握にある。知的実践的な組織的交流が主体の社会的意思形成をはかるさいの目標や重なりには、彼のかかわったその集団への接近や離反が映し出されている。つまり、政治と教育をめぐる問題関心の渦中にあった彼が、時代の公共性(Öffentlichkeit)のなかでのイデオロギー的社会史的な場面に身をひそめそこに雌伏する状況がその『ノート』に投射されている。『ノート』は、一方では『リーニハルト』の反響やその続巻の執筆計画のなかで道徳的週刊誌に接近する彼のジャーナリスティックな欲求や、終巻の第4巻にみられるごとき、執筆と実践の両面での限界やかげりを覚えて、いわばユートピアとイデオロギーとの間で揺れる関心をもっている状況を示すし、他方では公共性のみならず啓蒙の規定条件として支配、道徳、情念、習俗文化、職業などの見地や視点を正統的精神史の有名・無名をこえて専ら吸収していく場面のいわば容れものとなっている。彼の読書行為の特異さは、先のイーゼリンやエッシャー宛の手紙にもみえ、かつ、執筆動機とかかわりながら、『ノート』にもそれと抜書きとが混在しているが、ノイホーフでの施設の窮迫から閉鎖への過程と、のちのシュタッツ以後の実践活動との狭間で染色工場の手内職をしながら、事実の情報を印刷物で入手するとこ

ろにあった。これは彼のその前後の時期と異なる特殊な事情だし、ノート作業へ導いた条件であった。したがって、『ノート』には執筆草稿の点からはその前段で着想の刺戟を読書とノートへの抜書きで入手するとともに、その反応については彼の心理的ラディカリズムが抑制されることなく吐露されている。読書とそのノートとは、これらの受容、批判、独自性をふくめて、自己を対象化し、それを客観的に提示し検証するための尺度として必要になっており、その究明はわれわれにとってもペスタロッチにおけるいわば知識の社会的変容や心理的条件の問題として重要な課題となろう。

3) すでに『ノート』以前の段階でも、『ノイホーフだより』では施設の経営状況の収支報告を、『嬰兒殺し』ではその14の事例をもって論調の展開の実証的裏づけをしているのは周知のところである。『ノート』には G.D.K. List の『売春と子殺し』(Ueber Hurerey und Kindermord, 1784) の紹介にふれ、ことに牧師 E. Dürsteler による写本をチューリヒ市図書館から借用して進めた作業は、資料の内容やその入手方法でも特異だが、後者は主題的には15世紀の結婚と離婚をめぐる多くの審判記録を調査し、家族や性関係の問題への日常的社会的な一方ならぬ関心を示している。そこには KA に収録の地方農村の習俗論や都市の犯罪論などの問題との重なりがみえて社会史的視野を指摘できるし、極論すれば、精神(史)より社会(史)が、教育より犯罪が、前者の問題の究明への基礎視角となっているのは注目に値する。

また、いわれるごとき彼の人間学も、習俗という社会的事実とのかかわりをとおしてみれば、哲学的体系的よりも、むしろレペニースらのいう人類学的ないし社会学的人類学に近く位置し、あえて哲学的というなら、実用的ないし道徳的な通俗性をもっていて、それが教育学的思考の特質を示している。さらにスラブ世界をふくめて、M. Dobrizhofer のパラグアイのアビボナーの民俗誌にみられるごとき非ヨーロッパ的文化への注目と、その結果生じる自らの文化の相対化といった視座をもち、これらを媒介にしてはじめて「人類」概念の普遍性を入手しようという思考過程を示している。暫定的に類型的ないいかたをするなら、ペスタロッチへの着眼で開拓されるべきは、哲学的、政治的、精神史的次元や方法よりも、啓蒙、イデオロギー、経済、職業生活や言語や性をふくめた習俗文化などの日常次元なのである。

4) 最後にもうひとつ特記すべき課題には、この『ノート』がペスタロッチ自身の伝記的次元の資料としてもつ意味の究明がある。『ノート』に登場する彼の身の人物には、Franziska Romana の他に、神秘的アナーキスト G.A. Gramont, 政治的分離主義者 L. Jlli, 政治的理由で刑死した牧師 H. Waser などいて、彼らにつきすべてに反発的とはいえぬ言及をしているし、逆に他方では広くスイスをこえて時代の注目の的となった知己 J.K. Lavater への多くの否定的評価がみえる。とりわけこの時期の彼における伝記的関心の強さは、ルソー, C.F. Bahrdt, A.v. Knigge, J.C. Zimmermann, M. Anquetil, H. Sturz などの著作や手紙における自己分析的記述への関心の高さをみても明らかであろう。そこには39歳から48歳の時期の彼が上の彼らに自己を重ねるかのごとくおおむねネガティブな記述に着目しており、加えてシャフツベリーの<sup>エンツェジアスムス</sup>神がかり論やラバーターの行動的神秘論などへの関心にも、一種の感傷的かつデモーニッシュな様相を読みとりうる。これらが、彼自身の手紙やのち

の再三の自伝的作品の試みなどがみせる自己告白との重複をふくめて、その心理的世界の深層構造への関心をうかがわせる。その点からもこの『ノート』は病理的分析をも辞さず彼を究明する余地や必要を示す重要な資料というべきであろう。

## 2. 先行諸研究からの検討

上の1)～4)のごとく設定した研究課題の妥当性をさらに一層確かなものにするためには、現代までのペスタロッチ研究の問題視角や方法論の特徴傾向やとりわけその限界を意識化する必要がある、それによって今後の研究課題の意義も確認できる。ペスタロッチの生前における学園での協力者たちは、『ノート』の時期とその内容からしても登場すべくもなく、H. Morf や de Guimps をはじめとする19世紀の伝記的作業は、共通して学園での実践に重点をおき、それ以前の1780紀代後半からの10年間には十分な光を投じていない。前世紀後半でのヘルバルト派と同じ時期に F. Paulsen の線上で伝記的解明をした A. Heubaum なども個人主義と有機体説の緊張関係、人文主義的側面の擁護といった自らの時代の保守的な歴史課題から把えていた。シュツルム・ウント・ドラングやロマン主義といった文学史的概念にかなり傾斜して把えた J. Ulmer や J. Bobeth などの場合も、ペスタロッチが読書をとおしてみた当時の政治・経済論調や道德論などの世界とはひじょうに異なっていた。伝記的関心も大きかった P. Natorp は、自分のドイツ理想主義と民族論をむしろ投射しているし、論理主義的体系的志向の旺盛なこの新カント主義者には、ペスタロッチが Shaftesbury にとりつかれ、M. Mendelssohn, C.G. Selle, A. Eberhard などの意志の自由—必然論に苦闘したのに反し、ドイツ観念論の勝利は自明に近かった<sup>14)</sup>。

その後、1920年代に最盛期を迎えるシェーネバウム、F. Delekat, A. Stein, P. Wernle らの把握で共通して摘出されたのは、ペスタロッチの神秘主義的要素だったが、そのためにシュタインを除いて経済合理主義的側面や政治的規定要因への着眼がおおむね希薄になり、この時期の他の研究書も示すごとく、多くは彼の教育意志の根底に宗教的倫理的動機をみていた<sup>15)</sup>。かかる方向の限界の自覚ないし自己批判を端的に示す例として、上のデレカートがその第三版(1968)の副題に「政治家」を挿入した変化をあげることができよう。しかも、政治社会的行動とそれに係った読書サークルおよび文字どおりの読書とは、究明されるべき知識社会学的課題だが、ひとりの「天才」と時代の精神史の一般地平との合交をとおして造型されたペスタロッチ像には、深化され高揚されたものはあっても、教育世界の広さとその現実を視野に入れていた彼への十分な浮彫りは不足していた。また、彼自身の思想過程は、その知的側面では時代の精神史の代表者と同行するために、たとえばフィヒテのごとく、真正面から研究的にとりくむよりも、むしろ多くは間接的な紹介的な書評で接し、読書会的サークルとの接触のレベルにあったのだし、かつそれが実践性を帯びていたことは『ノート』にも裏書きされている。それゆえ、日常的、屈折的、秘教的であった彼の知的世界を発掘するには、1920年代の諸研究は余りに高踏的で十分でなかった。

二次大戦後60年代半ばまで優勢だった人間学的研究は、認識論にかわる現象学、存在論の優位、世界観や歴史主義からの脱却という哲学的潮流の反映でもあった。その初期形態では、W. Bach-

mann<sup>16)</sup> にみられるごとく、ペスタロッチにおいて実存開明を促すべく「<sup>イン・デア・ヴェルト・ザイン</sup>世界—内—存在」とその克服としての「超越」ないし「<sup>ミット・アインアンダー・ザイン</sup>共同—相互—存在」が L. Binswanger の線上で重視された。また、Th. Ballauf<sup>17)</sup> のように、ハイデガーの影響下で存在のロゴスへの聴従と自己理解とを「自然」の所与と真理と倒錯との構造的把握で試みることは、ペスタロッチ理解の人間学的基礎構造として強調された。かかる視点では、『探究』をいわば否定的媒介として『シュタンツ』以後に教育的世界が結晶化したとみる論及が一般的だったが、そこには1780年代と98年以後の実践との関連づけをよくなしえぬままに人間学的還元が導入され、ひいてはそれが国外でのフランス革命や国内でのシュテューパー運動などの政治的社会的変化の要因影響を抽象化してしまったのである。しかも人間学的接近一般は、知識社会学の対象やイデオロギー批判の対象となるべき戦中戦後現象のひとつであり、それが今日、一方でその認識関心が社会現実との間に断絶を生み、他方で実証主義とその同類である技術論的教育学の隆盛で人間学の後退を助長する面がみられるに至っている<sup>18)</sup>。

教育の規定条件を教育的人格や学校とそこでの教育方法に集約して把えるのは、実は世紀の転換期のヘルバルト派でひとつの頂点に達し、以後はその地平が精神史へと拡大され、その次元は人間学で深められてきた。しかし、この精神史と人間学、ないしは一言でいえば精神科学的教育学の形態と、そのペスタロッチ研究への影響に対して、否定的批判的に新風をおくったのが、他ならぬ A. Rang を代表とする「批判理論」的接近である<sup>19)</sup>。彼の著作は、フランクフルト学派のいちはやい適用として Th. Adorno の序文をもって1967年に世に問われたが、この立場からすれば、社会理論や教育的利害と連れいせぬ精神科学的研究と、さらに歴史事実を捨象して存在論的実存論的な概念設定をして人間学的「<sup>コンスタンツェ</sup>定数」でもって実践化する人間学的方法論とが問題であり、後者は前者の帰結でもあった。その結果、ペスタロッチの初期の啓蒙的合理主義的理論から中期の反政治的哲学的思想への行程自体を「人間学的転換」として弁証し、ひいては政治と教育との矛盾的な「破れ目」とその弁証法に目をふさぎ、前者を非本来的とし後者を本来的とする分極か、素朴な「調和」の主張に結びつく面が限界と映った。これが従来の「社会的ペスタロッチ」と「教育的ペスタロッチ」であって「政治的ペスタロッチ」ではなかったゆえんである。その点でペスタロッチは、ランクにより「非神話化され」(L. Froese)<sup>20)</sup>、「神話」のなかに棲息する研究を断罪する面と研究そのものをイデオロギー批判の対象とする次元が問われた。この論争的著作は、1780年代後半から1800年に至るほぼ10年間に論及の中心をすえるが、その直後の反響でも、この時期のペスタロッチの転回が論議され、たとえば従来のシュプランガーらのように、執筆内容の分析を中心に論じることごとき狭さから出て、客観的実証的地平に移され、デーユンクやマールブルク・グループの側でも95年か98年かをめぐって論争的な状況が生じた。

かかる転回をめぐる論議には、それが単純に伝記的なものか、自然概念にみられる基礎概念や社会政治的思想の転回か、執筆の内容と計画にみられるペスタロッチ自身のいうごとき「<sup>レグイジオン</sup>修正」(12. 169) か、あるいはこれらの総合的な変化か、さらには主体の意思形成の自覚的回心か、客観的背景に照準を合せた転向かなど、その測定の尺度の差により分岐するだろう。それだけに、かかる論

議では転回の特定の時点の決定よりも、それを醸成していく過程への着眼が必要である。たとえば、ランクの用いる分析カテゴリーは、批判理論の社会学的分析のそれに強く依拠しているが、この『ノート』は一方ではそこにみられる論著の抜書きとそれへの論評からしてペスタロッチの政治概念の変容の過程、ないし90年代の後半にもちこまれる転回の時期を吟味する素材ともなるし、他方では政治的教育的实践主体の条件とその心理構造の転向ないし変化をもいわば精神分析的に把握しうる内容をふくんでいる。J. Habermas らに照らしても、もしこのふたつの方面の総合的な把握を欠くなら、批判理論の一面的適用となり、ペスタロッチの政治的と教育的の二つの像を対比のままに放置するに等しくなる<sup>21)</sup>。

したがって、ランクによるペスタロッチ研究への寄与は、その論調の正当さや完結性によりも、先行研究の基礎理論の問題性とそれによるペスタロッチ像の造型の限界とを指摘したことにある。つまり、人間像や思想をめぐる概念上のあいまいさと拡大解釈や、それ以上に危険な人間の本質ないし「自然」の善悪、高低を形而上学的に先取りすることが、事実をイデオロギー的に加工し、その実態を隠蔽することへの警鐘にあった。しかも、加えていえば、ランクの提起がフレーゼらに1972年に流入したとき、戦後ほとんどデーユンクらの手で担われていまだ終結していないテキストの整理刊行作業が研究の重要な条件となり、研究問題の理論上、資料上の地平も拓かれ、その推進にも組織的な共同化の強化がみえるに至った。

フレーゼのいうごとく、70年以降のペスタロッチ研究は、「政治を抜きにしても」(apolitisch)、「歴史を欠いても」(ahistorisch) 進めえず、「解釈学的一文献批判的 (hermeneutisch-textkritisch) 方法」と「歴史的一社会批判的 (historisch-sozialkritisch) 方法」とで構成される「『総合批判的』分析」(,Synkritische Analyse) が必要である<sup>22)</sup>。このマールブルク・グループからすれば、ランクとデーユンクとの双方の限界を止揚する統合が課題となっており、いわばランク的な「政治的ペスタロッチ」は、「歴史的ペスタロッチ」へ、デーユンク的な「歴史的ペスタロッチ」はランク的な「批判理論的なペスタロッチ」へ止揚され統合されねばならない。

研究上の、いわば素朴な理論信仰や事実崇拜が問題なのは、個体と社会の発達の歴史的現象としての教育の場面でも、認識利害の先取りや実践主体の主観的恣意の合理化、対象への技術的操作的関心の潜入等から純粋に自由たりえず、事実資料の選択と評価にしばしばイデオロギー批判の対象となるものを含むからである。ことに教育者と教育行為を把握するさいには、規範化と概念化に急いで、その到達目標を指示するよりも、教育的な認識関心を形成させる過程や心理的動機の層位を照らし、その生活世界の内実と構造を抽出し分析することが重要となろう。その点でこの『ノート』は、かかる認識と心理との原型、ないしは未分化だが全体的な基盤を示し、認識関心と心理動機の生成過程が体系的閉鎖的完結性に至らぬところで開放されているものが読めるテキストだといえる。しかも、読書行為のノートとしては、他人の見地の受容や批判、自らものとの比較という「交流過程」がみられ、『ノート』の各所にある抑制のない直接的な反応は、正規の公刊物には隠れて不透明な部分や、逆に公刊内容に対立する層をもみせる貴重な資料となっている。この『ノート』が

知的実践的な論議の領域にかぎらず、心理的私的な問題領域や無意識的層位にかかわる記述も蔵している点で、ことに教育者の思想・理論・人格の理解にとっても、その資料的価値が高いといえよう。

### 3. 人類学的ペスタロッチ —その妥当性と必要性—

以下では、先にみたペスタロッチの執筆と読書とをめぐる若干の特徴と、先行研究の諸形態の功罪の自覚および批判的な継承をしつつ、さらなる展開をめざすさいにわれわれが留意しかつ課題とすべき点を『読書ノート』研究に限定して略記する。

われわれの『ノート』研究は、従来の研究に優勢だった中・近世の通史的な精神史や当代のそれにペスタロッチをすえ、いわば一般影響史として、とくにその正統の系譜に位置づけること、もうひとつはわれわれの側での教育の実践課題をむしろペスタロッチに投射してイデオロギー的に着色された歴史的意味をとり出そうとすること、このふたつへの短絡と拙速とにむしろ警戒と禁欲をする。むしろ、ペスタロッチの前に登場した文献とその抜粋や注記の事実を重くみて彼の読書行為と思想産出の特性をさぐることにある。それとあわせて彼が接した著者の版書や他の論著にも考察の場を拡大しながら、この時期の彼の知的世界を構成することにある。この断面は、理論と実践における前進や転回、さらには修正を論じる発展的なペスタロッチ像のみでなく構造的なそれを入力するためのモデルとなる。この『ノート』の内容と形式の特性は、1780年代というヨーロッパ史の客観状況と彼の存在証明をかけた個人史との両面で、政治的文化的な公共性や教育の言論の転換期にある様相、さらには彼自身がそれに参加する初期の形態を示している。しかも、この結果ペスタロッチの相対化がおこりランクがそうしたごとく「非神話化」へ進むとしても、その場合、時代の社会史的背景や心性の摘出、思想運動の影響力、実践の心理的動機を浮上させることでむしろ実態に接近し実像を回復させるのに役立つだろう。

もちろん、そのためには、端的に言えば、ペスタロッチ自身がこの『ノート』の時期もふくめて「この30年間書物など読まぬし読めもしなかった」(13. 196)と語る自己記述は撤回され、ニーデラーからナトルブに至るペスタロッチ「受容」にあった歪曲ないし観念論的強引さも修正されねばならない。従前の精神史的研究は、いわばディルタイ的な天才の系譜にペスタロッチを位置づけたが、むしろ時代社会における教育実践の精神的地平の、積極的な意味における通俗性や市民社会の論議にみられる個別的多様性、抵抗や批判性、さらには宗教的教派や政治的党派性がみせる秘教性などを確認し、これらがいかに思想と実践の活性化に機能しているかが解明されねばならない。1920年代後半以降のペスタロッチへの精神史的接近と伝統主義的高踏的発想をもった文化教育学とは同類であって、啓蒙は必ずしも啓蒙主義者の領分にはない。それゆえ、かかる高い上からの啓蒙主義の精神史が民衆の社会史的地平へひきおろされ、否定的契機をはらみながら展開するダイナミズムをとらえる必要がある。また、人間学的研究が実践の実存の次元とその構造の解明に光をあて深化した点は評価するとしても、「自然」の変数との相関で示した還元的な説明には思弁性が付着しており、それを教育実践の指標のごとく規範化し実体化する問題点を克服する必要がある。

『ノート』にみられるのは、道德の客観的価値規範の導入ではなく、むしろ逸脱をふくめて生活行動の事実と、その多様性や可変性をめぐる文化を追究しようとする「人類学」であり、習俗の人類学である。端的にいえば、いわば「人類学的ペスタロッチ」をめざすかのごときわれわれの今後の作業仮説には、以下の四つの理由でその展望が入手されると考えられる。

1) 『ノート』の記述内容から。ペスタロッチは現存の MS の最初の二箇所 (L と N) に M. Dobrizhofer, *Geschichte der Abiponer, einer betrittenen und kriegerrischen Nation (sic!) in Paraguay* の書評的紹介から抜書きをし、非ヨーロッパ圏文化の言語生活と文法、社会階層や性差や婚姻関係等につき丹念な写しをしている。また、『スイス週報』にも引用のある (8. 126f) G. Rollenhagen の動物寓話からは転じて職業、食事などの生活圏や階層による習俗の差に筆をそめ、さらに別の個所ではウィーンとベルリンの習俗の差や、スラブ論ではその言語に関心を示している。したがって、たとえシェーネバウムのいうごとく、これらの MS のグループのテーマが「道德の秩序」(9. 306, 315)だとしても、ペスタロッチは道德学的理性論的であるよりも文化人類学的な習俗論から接近している。一方、彼みずから「人間の究明」、「人間論メモ」、「人間試論のために」(9. 347, 356)などと標記する MS には、情念、衝動、自由、慣習などの概念が自立つが、全体としていえば哲学的より心理的ないし<sup>モラリスト</sup>人性論的であり、その社会構造との関連が上のごとき内容の人類学的主題へ接近しうるものが示されている。

2) かかる傾向は、彼の一連の作品執筆の経過からも実証しうる。『リーンハルト』は、ペスタロッチが「農民の言語の練習」(B. 517)をしながら、「起こりしまま聞きしままに事態を語ること」(2. 158f, 3)を目標にし、彼自身をも「私も人々の間に坐っていた」(2. 352)として作中に潜入させながら創出した成果であった。もっとも、そこには政治的支配統合、経済的政策立案、文化的イデオロギー指導といった実践的関心が投射されているが、それらのみが意図として表面化するときには発生するのは、第4巻にみられるごとき、いわばイデオロギー的対立とシニズムである。指導層による上からの教化と外部からの啓蒙は、当の農民を客体化し、文化的通路の敷設を単一で一方方向的にする。しかもそれには自然的基盤の衰弱した言語文化の問題がひそむ。また『ノート』の開始期と重なってその初期には『農村習俗の価値』(1785)や都市と山村の比較を試みたりし(1. 191～202)、その後期には『探究』にも習俗論的事実のエピソードが多くみうけられる。

3) 時代の知的動向の変化とその組織化との重なり。ドブリツホーファーなど上の1)の論者をペスタロッチが知ったのは、82～85年の *Deutsches Museum, Berlinisches Magazin der Wissenschaften und Künste, Allgemeine Deutsche Bibliothek* の三誌からであるが、先行したフランスでは70年代末から80年代末にかけ、ルソー、ヴォルテール、ダランベール、ディドロなどの死が示すごとく、ひとつ時代が終らんとしていたし、ドイツでは J. Möser, J.G. Herder, W./A. Humboldt 兄弟, J./W. Grimm 兄弟などのごとき民俗的、歴史的、人類学的な傾向が浮上せんとしていた。いわば「観察する理性」(*beobachtende Vernunft*)が啓蒙の観念の実質化やその批判に向かいつつあった<sup>23)</sup>。スイスでもそのフランス語圏では A.C. Chavannes のごとく、人間の本質の学から人類学や民俗学に転

じて教育論を展開する動向もみられた<sup>24)</sup>。当のペスタロッチは旧時代の二、三の作品を読み、新時代のひとりヘルダーからの賞讃をうけていた。『ノート』にみられるように、ラバターやシャフツベリーへの彼の熱中は、たしかに、「人間の本質」を把え、「汝自身を知れ」の命に誠実たらんとする姿勢であったが、前者への反発は、農民、山間民の層の風俗習慣やいわばその自然言語への関心からもおこりえた。しかもこの方向は、知的結社として組織化されていくのであり、たとえば J. Bodmer らの Gesellschaft der Mählern は、本来、言語の実態と出版物や読者との関係を積極化する目的をもつ運動体であった<sup>25)</sup>。それゆえこれらは従来の政治的人道的解釈の陰から抜け出させる必要がある。また、以後の『探究』であれ、『時代に』であれ、歴史哲学的視座が提示されるが、そこに「自然」が演繹的な指導原理となると、歴史哲学も人間学に還元される。しかし、自然の多義性と本能的ないし本質の一元化の否定には、ヘルダーをとおしてゲーレンが示しあるいはハーバマスがいうごとく、社会学的人類学ないし人類史に至るこの時代の一面があったのである<sup>26)</sup>。

4) 現代のペスタロッチ論議への問題提起として。知られるように、ランクはその『政治的ペスタロッチ』で、研究視角としては1960年代前半まで指導的地位を占めた教育人間学ないし人間学的教育学との平行現象とみなしうるバッハマンらへの反措定を提示し、ペスタロッチ評価にあつては反革命的ないし保守的ペスタロッチ像を浮彫りにして、そこに政治から教育への「敗走」をみた。人間学的接近がことに重視したのは97年の『探究』であり、事実ペスタロッチ自身はその前後においてフランス革命をスイス国内の政情に対し幾多の時論的文書で反対ないし鎮静化の方向をうち出していた。かかる研究の視座とペスタロッチそのものとの問題性を解明する方法としては、上の1)~3)でふれた人類学および人間学とイデオロギーとの関係の理論的かつ実態的な把握を強化する必要をあげうるだろう。

もし『夕暮』から『探究』にいたる自然概念の変容を人間の本質の発達の歴史的展開の可能性や必然性の提示とみ、それが政治、信仰、教育文化の進行方向を示すとみなして、人間学的に根拠づけ弁証しようとするなら、人間学は「イデオロギー産出的」(K. Schaller)<sup>27)</sup> 機能をはたすし、その結合はペスタロッチならびに彼への研究接近の双方における限界だとする批判はおこりうる。しかし、そこには『ノート』をめぐる次のふたつの相反する問題がある。ひとつは、『ノート』等にある人類学的視点はイデオロギーを批判・克服するのか、あるいは人類学的思考に通有の保守化が登場するのではないか、ということである。少くともイデオロギーを相対化していく傾向はみてとれる。もうひとつは、もしそうだとすれば、ペスタロッチが政治や教育への実践の契機を入手するのはどこからか、という問題である。『ノート』での上の1)の事実のかたわらで目立つ結社活動をめぐる記述、伝記的関心や心理的葛藤などは、イデオロギーとエスノロジーの両者にかかわりつつ、彼自身の社会的アイデンティティの葛藤危機とその出口を探す様相がみえる。

ここにランクのごとく、政治的ペスタロッチと教育的ペスタロッチを非本来的と本来的とに対立的に設定し、歴史状況の媒介で後者へ矮小化されたとして、その止揚の失敗と問題性を論じることが慎重を要するだろう。理論的にも、政治的ペスタロッチが教育的ペスタロッチへ無媒介に転じた



のではなく、その媒介に人類学的ペスタロッチがいること、そしてそれがイデオロギーへの傾斜に抑制機能をはたし、教育の日常次元を浮上させていることの二点に注目する必要がある。この期におけるペスタロッチの人類学的思考の課題は、人間学的な歴史哲学的展望を図式的思弁的に提起することよりも、彼自身の反省的契機に動機づけられた形成過程の個別性と民衆の日常性が、いかに共通の一般的地平をもちうるかの検証や確認にあるし、また、その方向づけは彼と民衆のアイデンティティ獲得と成熟の方向を問うことにある。その検証や確認を可能にするのは、単に政治的でも人間学的でもない、歴史的人类学的な究明にある。

### III 要 約

筆者は、チューリヒ中央図書館でペスタロッチ全集批判版の第 9, 10, 11 巻の、いわゆる『読書ノート』と、その手稿とを比較した結果、全集には転写収録されていない部分をもつ手稿の 227 枚を確認し、あわせてその複写も入手しえた。未収録部分の発表は別の機会に譲るが、今回の本稿では今後の『ノート』研究の問題点とその推進の方向につき計画の概略を提示することを課題として以下の論点を示した。かくも多くの未公刊部分が生じたのは、批判版の作業を担当したシェーネバウムが、手稿を 1) ペスタロッチの作品の執筆構想やその断片の点からとらえてテキストへの採・不採の決定をし、2) フランス語の書物からの抜書きおよびペスタロッチ以外の手になる抜書きと、3) 判読や解説に困難な文、語、汚損、符号など、多くの部分を収録から除外したこと。加えて、4) この作業の当時の教育学の主流であった精神科学的教育学の認識関心に規定されていること、これらをその事由として示した。ペスタロッチが単行本、定期刊行物、写本、ドキュメントなどを読んでそれらへの論評や文字どおりの抜書きの写しをし、さらには私的な手記や心理的な内容もしたためているこの『ノート』の手稿は、他に公刊されたり成稿となっていたものとは異なる次元を示していた。そこには情報収集をとおして思想形成をし、執筆の構想をする研究的な営みとその方法を中心にしながらも、伝記的にも興味ある次元がみられ、従来の研究がほとんどふれなかった特異かつ新鮮な資料となるものがある。

かかる評価をふまえ、われわれは、彼の『ノート』研究の課題として次の四つ、1) 約 70 種にのぼるタイトルの原典と比較し、その類同と差異を調査することで、彼の思考の方法とその過程を抽出すること。2) 読書傾向を規定した結社活動に光をあて、そこでの彼の知的世界とを再構成するとともに当時の知的ジャーナリスティックな市民的公共性の問題を究明すること。そして、3) 彼には啓蒙のヨーロッパ精神史よりも、むしろ日常の社会史と非ヨーロッパ的な文化論の傾斜がみられる層を摘出すること。また、4) 同時代者の数人の伝記に示する関心と彼自身の手記とを重ね合わせることで彼の伝記の新しい次元を開拓すること。これらの意味と解明の必要やその可能性を提起した。

要するに、これらは、従来のさまざまなペスタロッチ像との関係でいうならば、いわば人類学的ペスタロッチともいふべきものを提示する試みとして集約しうるし、その成立する理由は 1)

『ノート』にめだつ記録内容, 2)1780年代と90年代の彼自身の著作との関連, 3)時代の新しい知的動向の三点から示しえた。以上の課題の解決でもってペスタロッチに対する現代の人間学的, 歴史的, 社会批判的研究傾向の対立に一定程度の止揚ないし和解の提言もしうると考えられる。

## 注

- 1) Pestalozzi Sämtliche Werke, hrsg. v. A.Buchenau, E. Spranger, H. Stettbacher, 1927 ff, 28 Bde (Kritische Ausgabe). 以下, この引用表示は本文中に, たとえば, Bd. 13, S.360 なら, (13.360) と記す。また書簡集は, Johann Heinrich Pestalozzi Sämtliche Briefe, hrsg. v. Pestalozzianum u.v. Zentralbibliothek Zürich, 1946~71, 13 Bde を用い, (B. 書簡番号) で示す。なお, カッコ内で S. を付した場合は, 校閲者による付録部分の参照ページをあらわしている。
- 2) Schönebaum, H., Pestalazzi, Kampf und Klärung 1782~1797, 1931, S. 106ff; Otto, E., Pestalozzi, Werk und Wollen, 1948, S. 132; Fischer-Züst, F., Über Freiheitsbegriff, 1951 (Züricher Diss.), S.16; Toivio, J., Pestalorri «Lebenskrise» und seine Auffassung vom Menschen, 1955, S. 177~191; Birk, I., Die empirische Basis des pädagogischen Denken bei Pestalozzi, 1970 (Erlanger-Nürnberger Diss.), S. 243~253; Rang, A., Der politische Pestalozzi, 1967, S.315.
- 3) Israel, A., Pestalozzi Bibliographie, 3 Bde, in; Monumenta Germaniae Paedagogica, Bd. 29~31, 1976 (1904); Klink, W., Pestalozzi-Bibliographie, 1923; Klink, J.-G./L., Bibliographie Johann Heinrich Pestalozzi, 1968; Kuhlemann, G., in: Pädagogische Rundschau, 1980, 2/3, S. 189~202. なお, 近年 A. Brühlmeier が編んだ3巻本の作品集にこの『ノート』の一部の収録がみえるが, 自由必然論の部分で KA の再録である。J.H. Pestalozzi Auswahl aus seinen Schriften, Bd. 1, 1977, S. 87~97.
- 4) この婚姻審判記録の部分『読書ノート』に入れるかどうかは若干の議論の余地はあろう。また, この部分のみは E. Dejung の校訂である。
- 5) Vorarbeiten und Entwürfe (zu Wie Gertrud ihre Kinder lehrt, 1801), 13.360~389, o.J. ca.1800 nach H.Schönebaum (S.13.485ff); Entwurf zu einem vierten Teil (zu Lienhard und Gertrud, 2. Ausgabe, 4.503~555; Entwürfe zu den „Nachforschungen“, 12.167~241; Über Barbarei und Kultur, 1797, 12.243~259; Erster Entwurf zum Zweiten Zehntenblatt, 1798, 12.469~492; Ansätze zu einer Fortsetzung des zweiten Zehntenblatt, 1800, 12.493~502; Entwürfe zu der Pariser Denkschrift, Dez. 1802, 14.353~361; ABC der Anschauung oder Anschauungslehre der Maßverhältnisse, 1803, 15.175~340; Vorrede (Buch der Mütter, 1803), 15.343~346; Drei Entwürfe zu einer Vorrede für das «Journal», Entwürfe zu den «Journal», 19.89~99; Entwürfe zu den «Ansichten und Erfahrungen», 1806, 19.191~209; Erste Fassung (Mémoire an den Friedensfürsten Codoy in Spanien, Sept. 1807, 20.275~277; Pestalozzi an Herrn Geheimerath Delbrück 1813, 23.223~244.
- 6) Rupprecht, H., Pestalozzis Abendstunde eines Einsiedlers, 1934; ders, Pestalozzi Die Abendstunde eines Einsiedlers—Kritische Ausgabe in ihrer rhythmischen Gestalt und handschriftlicher Entwurf mit beigelegtem Faksimilie des Entwurfs—, 1935.
- 7) Kodama, M., Bibliographie über Pestalozzi, 2 Bde, 1973.
- 8) この広く流布している『夕暮』の読解の多様性は, わが国でも長田新, 福島政雄, 梅根悟のそれぞれの邦訳や, この三者をめぐる長尾十三二の特異な論文がある。また, 筆者は『夕暮』の草稿, 初版本, ニーデラー本における変化を, とくにその使用語彙の頻度をとおして考察したことがある。
- 9) 以上のことは, たとえば, シューネバウムの場合では KA 1.250, Z.1~12 の部分, ルプレヒトの場合では 6) S.72 およびその MS ファクシミリ番号26, 児玉の場合では 7) S. 145f およびそのファクシミリ S.71 (ただし, 全2巻中のひとつ, 表示なし) の内容同一個所の比較でもって実証しうる。

- 10) Dejung, E., Verlorene Schriften Pestalozzis, in: Zeitschrift für Pädagogik, 1971, Nr. 5, S. 617～629. ちなみに, Gagliardi, E. (hrsg.v.), Katalog der Handschriften der Zentralbibliothek Zürich II—Neure Handschriften seit 1500—1949, 1566～1678— と, Dejung, E., Johann Heinrich Pestalozzi Sämtliche Werke und Briefe, 1977, 1982 ergänzt をみると, 少くとも『ノート』の時期まででは, 受・発信の手紙の写し, ノイホーフの紡糸工場での子どもの名まえ, Allgemeine Begriffe der Illuminaten (326a), Ehrerbietige Gegenvorstellung...für die Gesellschaft Lenz (329a) などが全集に収録されている。ただ, 上の 326a は Israel のビブリオグラフィーに登場する。
- 11) Schönebaum, H., cf. 2) S. 104～109.
- 12) ibid., S. 105f.
- 13) Dejung, E., Johann Heinrich Pestalozzi, in: Schweizerische Zeitschrift für Geschichte, 1980, H. 1, S. 87～101; ders., Zur Problematik bisheriger Pestalozziforschung, in: Pestalozzianum—Mitteilungen des Instituts zur Förderung des Schul- und Bildungswesens und der Pestalozziforschung—, 76. Jg, 1980/4, S. 21～25; 拙稿「ペスタロッチ研究の変遷と新動向」教育学研究 48巻 2号, 1981, 45～55.
- 14) Morf, H., Zur Biographie Pestalozzis, 1865 ff, 4 Bde 長田新訳; de Guimp, R., Histoire de J.-H. Pestalozzi, 1784, 新掘通也訳; Heubaum, A., J.H. Pestalozzi, 1910; Ulmer, J., Die Selbständigkeit des Menschen in der Pädagogik Pestalozzis, 1927; Bobeth, J., Die philosophische Umgestaltung der Pestalozzischen Theorie durch Niederer, 1913; Natorp, P., Pestalozzi, sein Leben und seine Ideen, 1913, Idealismus Pestalozzis, 1919.
- 15) Delekat, F., J.H. Pestalozzi, der Mensch, der Philosoph und der Erzieher, 1926; Stein, A., Pestalozzi und Kantische Philosophie, 1927; Wernle, P., Pestalozzi und die Religion, 1927.
- 16) Bachmann, W., Die anthropologische Grundlagen von Pestalozzis Soziallehre, 1947.
- 17) Ballauf, Th., Vernünftiger Wille und gläubige Liebe, 1957.
- 18) 拙稿「思想の理論化と理論の思想性—J. Habermas の思考過程と教育理論への示唆—」鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編 32, 1981, 215～273; 同「教育学における批判理論と啓蒙実践の構成—最近10余年の西ドイツでの典型—」, 同上 36, 1985, 191～224.
- 19) Rang, A., Der politische Pestalozzi, 1967.
- 20) Froese, L., Kamper, D., Krause-Vilmar, D., Messmer, H., Pippert, R., Rückriem, G.M., Zur Diskussion: Der politische Pestalozzi, 1972,
- 21) cf. 18).
- 22) 20) 16, 11. なお, フレーゼらの共同研究と同年, 同じマールブルクからの成果としてクラブキも評価しているフリートリヒの学位論文も注目される。そこではデーユンクの史料実証性を尊重しつつフレーゼらの政治的歴史的な方向を補強する線上にたち, いわば「経済的ペスタロッチ」の相貌をみせ, 「所有が政治的解放のの解読符号であり」, それを「政治と教育との連関のスペクトル」とする課題設定とその帰結は, 宗教, 政治に加うるに経済というもうひとつのモチーフをみせている。Friedrich, L., Eigentum und Erziehung bei Pestalozzi, 1972, SS. 297, 302～5.
- 23) Moravia, S., La Scienza dell'Uomo nel Settecento, 1970, übers. v. E. Piras ins Deutsch, Beobachtende Vernunft—Philosophie und Anthropologie in der Aufklärung—, 1973, S. 7.
- 24) a.a.O. SS. 160ff, 294f.
- 25) Im Hof, U., Das gesellige Jahrhundert—Gesellschaft und Gesellschaften im Zeitalter der Aufklärung—, 1982, S. 125f.
- 26) Lepenies, W., Soziologische Anthropologie, 1977; Marquard, O., Schwierigkeiten der Geschichtsphilosophie, 1982.
- 27) Schaller, K., Einführung in die Kritische Erziehungswissenschaft, 1974, S. 124; Klafki, W., Aspekte kritisch-konstruktiver Erziehungswissenschaft, 1976; 拙稿 18).

## ZUSAMMENFASSUNG

Toshiaki MIYAZAKI

Die unveröffentlichten Manuskripte J.H. Pestalozzis „Bemerkungen zu gelesenen Büchern“ (1785~1796/97) I —Problemstellung und Arbeitsprogramm—

Wir konnten die von H. Schönebaum bearbeiteten Texte von Pestalozzis Bemerkungen zu von ihm gelesenen Büchern in den Bänden 9, 10 und 11 der sogenannten Kritischen Ausgabe, 1930 bis 1933 und deren Manuskripte, die zur Zeit in der Zentralbibliothek Zürich (Nachlass Nr. 315~321, 332~333, 338~344, 355 und 377) und im Akademiearchiv der Pädagogischen Wissenschaften der DDR (7 Blätter) vorhanden sind, vergleichen und prüfen. Dabei stellt sich heraus, daß von dem Bearbeiter 227 Blätter nur teilweise oder gar nicht transkribiert und in die Kritische Ausgabe nicht aufgenommen sind, obgleich Schönebaum diese ausführlich und gründlich bearbeitet hatte.

Unserer Meinung nach kommen diese vielen Weglassungen von der Transkription oder Aufnahme zu den Gesamten Werken aus folgenden Gründen:

1. Schönebaum hatte die Manuskripte vorwiegend für einen Schreibplan Pestalozzis gehalten.
2. Bei den ausgelassenen Texten handelt es sich auch um Auszüge von Büchern, vor allem französischen und um Texte, die mit anderer Hand geschrieben sind und die deshalb Schönebaum für nicht so wichtig hielt.
3. Schönebaum hatte es mit schwierigen Stellen, Wörtern, Satzlücken, und komplizierten Zeichen zu tun, die ihn bei seiner Bearbeitung behindert gehabt.
4. Die Textauswahl Schönebaums ist zudem vermutlich durch das geisteswissenschaftliche oder kulturpädagogische Interesse für die Erkenntnis, dem damaligen Haupttrend der Pestalozzi-Forschung begrenzt worden.

Die nachgelassenen, jedoch teils verlorenen Manuskripte seiner kritischen und sympathischen Bemerkungen zu gelesenen Büchern, Zeitschriften oder Dokumenten und deren Auszüge einerseits sowie seine biographische Aufzeichnungen andererseits haben jedoch mehr Wert für die andere neuere Erklärung seiner Biographie als seine systematischen und veröffentlichten Schriften. Diese sind noch zu forschende Materialien, die von seinen anderen Schriften verschieden sind, weil man Pestalozzis Denkweise und Schreibart ersehen und vom Stand der heutigen Kenntnisse der Psychologie beleuchten kann. Auch müssen wir bei den „Bemerkungen“ folgendes für wichtig festhalten: Seine Absicht bestimmt sein Sammeln der Informationen über die Themen der Zeit. Somit geben diese Informationen Abschluß über seine Ideen und Interessen. Wir können damit die intellektuellen

tuelle Welt Pestalozzis und seiner Zeitgenossen, mit welchen er direkt oder indirekt Verbindung hatte, und den damaligen sozialgeschichtlichen Hintergrund erhellen.

Wir stellen uns als unser zukünftiges Arbeitsprogramm folgende vier Aufgaben. Wir haben die Absicht:

1. die etwa siebzig Titel in den „Bemerkungen“ und die Auszüge daraus, seine Kommentare, die Eindrücke und Kritiken zu untersuchen und so Einflüsse auf Pestalozzis Denkprozess, sowie Ähnlichkeiten zwischen anderen Autoren und Pestalozzi herauszustellen. Dadurch können wir seine wirkliche Welt, die von der Welt früherer geistesgeschichtlicher Prägung verschieden ist, erhellen.
2. die Ausführung von Pestalozzis Buchlesungen oder der Wiedergabe von Buchauszügen in der damaligen Lesegesellschaft oder im Illuminatenorden zu erklären. Das ist eine einzigartige Handlungsweise, die man in seinen jungen sowie ältere Schaffensperiode nicht bemerken kann.
3. im Gegensatz zu den philosophischen, politischen, religiösen und geschichtlichen Hauptströmungen der Aufklärung den ethnologischen und sozialhistorischen Alltag der Landleute und Bürger um Pestalozzi sowie in ganzen europäischen und außereuropäischen Raum, auf den er Rücksicht nimmt, zu prüfen oder zu untersuchen.
4. die verborgene Dimension seiner Biographie entsprechend zu bewerten, denn in diesen „Bemerkungen“ hat Pestalozzi viel Interesse für das Leben der Anderen, z.B. J.J. Rousseau, C.F. Bahrdt, A.v. Knigge, J.G. Zimmermann und so weiter und hat er vom ihm selbst geschrieben.

Wir haben viele Pestalozzis Bilder gehabt: z.B. der soziale bzw. idealistische Pestalozzi, der geistesgeschichtliche, der religiöse, der anthropologische, der politische, der pädagogische oder historische, wie sie bei Natorp, Seidel, Schönebaum, Delekat, Bachmann, Rang, Pippert, Froese gezeichnet sind. Wir möchten dazu in unsere Arbeitshypothese über die „Bemerkungen“ betonend auf den ethnologischen Pestalozzi hinweisen. Es wäre möglich und nötig die Pestalozzi-Forschung unter diesem Aspekt weiterzuführen und folgende Quellen und Themensstellungen zu untersuchen:

1. die Inhaltsauszüge in den „Bemerkungen“: z.B. der Geschichte der Abiponer in Paraguay, die Sitten und Sozialzustände in Wien und Berlin, England und Italien, in der Sprachgebrauch in Slawien und so weiter.
2. die Entwicklung seiner Schriften in dieser Periode: z.B. die Beschreibung des Zustände des bäuerlichen Lebens in „Lienhard und Gertrud“, die Beobachtung der sittlichen Werte in Dorf, Wald und Stadt, die Darstellung der ethnologischen Episoden in „Nachforschungen“ und anderes.
3. die Beeinflussung seiner Schriften durch den damaligen neuen intellektuellen Trend der

## Ethnologier oder Sozialanthropologie.

Wir können und müssen damit die Gegensätze zwischen Anthropologie und politischen Auffassungen, und zwischen Ideologie und Ideologiekritik im und über den Bildungsprozess erklären. Wir zeigten auf Grund der Prüfung der bisherigen Pestalozzi-Forschungen, daß, wie oben gesagt, Pestalozzi in ethnologischer Sicht bisher thematisch nicht so viel behandelt ist. Somit hoffen wir an der gegenwärtigen Forschungsdiskussion, die A. Rang mit seiner Kritik am anthropologischen Ansatz neu entzündet hat und von der Marburger Forschungsgruppe und E. Dejung weiter geführt wird teilnehmen zu können.

Danken möchte ich für die wissenschaftliche Beratung und Unterstützung von wie: Prof. Dr. W. Klafki, Prof. Dr. L. Froese, Prof. Dr. R. Pippert, Prof. Dr. H. Stübiger von der Universität Hessisches Marburg, Dr. F. Wolff und R. Pelda vom Hessisches Staatsarchiv Marburg, Prof. Dr. J. Derbolav von der Universität Bonn, Dr. u. Dr. h. c. E. Dejung in Winterthur, Dr. J.P. Bodmer in Zürich; sowie der Zentralbibliothek Zürich, dem Pestalozzianum Zürich, den Universitätsbibliotheken Marburg, Göttingen, Basel u.s.w., der Herzog August Bibliothek Wolfenbüttel; dem Deutschen Akademischen Austauschdienst und der Deutschen Forschungsgemeinschaft.

Sonderdruck von

The Bulletin of the Faculty of Education, Kagoshima University, Culture and Social Sciences, 37 (1981),  
Kagoshima, Japan